

二期工事粉碎・ジェット増送阻止・9.16総決起へ！

「大風車」がまわりだした！

木の根の大風車が水を汲み揚げはじめた。直径一〇メートル、赤と緑に鮮やかに塗り分けられた大風車が三里塚の豊かな風をうけて、ゆっくりとまわり、農民の生命たる貴重な用水を立派にくみ上げ始めたのだ。

木の根の大風車は、三里塚農民そのものだ。大地にしっかりと足をふんばり、あくまで農業と農地を死守すべく、揚水用大鉄管は地下五〇メートル、二期工区・横風用滑走路予定地の心臓部を深くとつらぬき通している。

「立派な風車ができた。この風車の力で森山発言！政府・公団のたくらみをふっとばして、二期工事を絶対阻止し、廃港にするまでがんばる決意だ！」敷地内で闘う小川直克さんは、9・16現地総決起を訴える中できっぱりと言いつつ、切っている。

絶望的あせりの「二期工事強行」攻撃を、うちくだけ！

政府・公団は「滑走路一本のみ」で「貨車輸送に頼るジェット燃料」をはじめ、数々の欠陥をそのままに5・20暫定「開港」を強行したが故に、今日、未曾有の破綻的事態に追い込まれてしまっている。

7・16「森山発言」による見えすいたベテンの「対話路線」の一方的宣伝こそ彼らの危機を象徴するものだ。絶望的危機にかられて、逆に「どんな手を使っても反対同盟をつぶさなくては空港は破産する」と、反対同盟の組織そのものを切り崩し解体するという攻撃に出て来たのだ。今こそ、一四年間の全蓄積をこめた、9・16集会の大爆発で政府・公団のたくらみをうちくदैいてしまわねばならない。

今こそ「労農連帯」の真価を発揮し、9・16大結集を實現しよう！

「二期工事強行」とは一体何をさすのか。それは、敷地内一七戸の農民を殺し尽す攻撃であり、人民の全ての闘いを圧殺する攻撃である。

麦一粒もとれない草ぼうぼうの荒地地をくわ一本頼りに開墾し、食うや食わずでや々と農家として自立してきた。家も建てた。首都圏有数の豊かな穀倉地帯にまで土地を育てたところがあるが、ある朝、全く突然に「お前の土地・家・財産、全てとりあげる。百姓やめて三里塚から出てゆけ」という「閣議決定」を新聞の朝刊で知らされるのである。

以降一四年間、責任ある「話し合い」などどこからもありしなかつた。大量の機動隊、大型ブル・ハイエナの金融ブローカーどもが「権力」をかさに三里塚をとことん踏みじり、何人もの闘う人を虐殺し傷つけ、農地を荒してまわった。

身体をはってこれと闘う農民の血と汗と泥にまみれた闘いの経過を見るととき一四年間の正義が一体どちらにあるのかはあまりにも鮮明といわねばならない。「国策だから従え」「できてしまったものは認めよ」とくり返したとしても、この三里塚農民の「最低限の生きる権利」は「正義の闘いを踏みじることにはできない」。

国鉄労働者にかけられている三五万人体制攻撃と三里塚への二期工事強行攻撃は全く同質の攻撃であることを見なければならぬ。今こそ労農連帯をもって闘うときである。

9・16三里塚へ最大限の結集をかちとってゆこう！

9.16全国総決起集会
三里塚第一公園 正午
三里塚芝山連合空港反対同盟

昨今の「オルグ」の実態（その7）

八月二二日八津田沼支部

「本部」教育センター・鈴木真一（暴力集団幹部）は二五名の「オルグ団」に「守られて」例の尊大な態度で乗務員詰所の長いすにふんぞり返っていた。乗務を終えて帰ってきたB君に「ずいぶん大きな態度じゃねえか」と言われた鈴木は、大急ぎで立ち上がり、インギン無礼を絵に描いたように一礼してB君に話しかける。

話の内容は、①「安定宣言」は、反合闘争の絶対反対路線を放棄するものではない。②一つの戦術にすぎない。近くで聞いていた支部の活動家が「

先日来た芳原某（元関東青年部常任）は、「

反合闘争は絶対反対では聞えない」といつていたがどうなのか」と質すと鈴木は、「全国大会の討論と決定方針についてよく理解していないからだ」と下部へ責任転嫁。

だまって一通り聞いていたB君最後に一言、「おめえらそうやって、どんな動労を悪くしてしまえよ。俺たちには関係のない組合だからな」この一言で、さすがの暴力集団幹部・鈴木も何も言えずギャフン！